



- ・巻頭言……………1
- ・研究所活動報告……………2

- ・豆手帖^{④3}……………3
- ・催し物案内等……………4



トランスフォーマーが 作るのはユートピアか？

経済学部長 増 川 純 一

OpenAIという米企業が2022年11月30日にChatGPTをネット上に公開した。もうほとんどの人がご存知であろうが、ChatGPTはそれぞれの国の言語で問いかけを行えば、答えを返してくれるChatシステムである。例えば、質問を促すプロンプトに「大阪弁で自己紹介して。」と入力してみると、こんな回答が返ってくる。「おっす！わてはChatGPTやで。OpenAIが作り出したんや。いろんな質問に答えたり、おもろい話ができたりするんや。文章を書いたり、画像をつくることもできるんやで。何か知りたいことがあれば、なんなりと訊いてみてや。おおきに！」。さらに続けて、「大阪弁が少しおかしいですよ。」と指摘すると、「すんまへん、完璧にはできひんけど、またチャレンジさせてもらいますわ。わてはChatGPTや。OpenAIが育てたんやけど、しゃべりは標準語が基本なんや。大阪弁もまだ修行中やねん。でも、話すことや文章書くこと、画像つくることなんか得意としますんで。なんぼでもおたずねやすう。」と返してくる。まるで画面の向こうに人間がいるかのように会話を続けることができる。その上（リクエスト次第では）有能で、入力した文章の要約を依頼することもできるし、挨拶文の原稿やメールの文章案を（好みの作風で）作成してくれたりもする（プログラムも書いてくれる）。このような有用な機能が、無料で公開され、公開から1週間で100万ユーザ、2ヶ月で1億ユーザに到達した。

ChatGPTは、OpenAIという企業が開発した大規模言語モデル（LLM）と呼ばれる人工知能の一つで、ディープラーニングというプログラムの範疇に属する。ディープラーニングは、2012年に画像認識の分野で大きなブレークスルーを起こしたのち、2015年にAlphaGoと呼ばれるコンピュータ・プログラムが囲碁の世界チャンピオンと対局し、5戦全勝の成績

を収めたことで一気に注目を集めた。人間に限らず動物が優れた情報処理能力を持つことは異論のないところであるが、その情報処理を司る脳の神経回路網を模したハード、あるいはソフトウェアを作れば高度な情報処理能力が得られるのではないかという発想は自然であろう。ニューラルネットワークという情報科学分野の研究はそのような発想から生まれた。ディープラーニングは、数々のブレークスルーを経て達成されたニューラルネットワーク研究の一つの到達点である。高度な画像認識や自動運転はディープラーニングの技術なしには実現できない。

ディープラーニングは大量のデータを学習することによって、モデルのパラメータをチューニングして高度な機能を実現する。最新のOpenAI社製LLMであるGPT-4は2023年4月までネット上のあらゆるテキストやプログラムを学習し、1兆個を超えるパラメータをチューニングしていると言われている。LLMは、2017年に公開されたトランスフォーマーというアルゴリズムの発明が基礎となっている。

2012年のディープラーニングのブレークスルーからわずか5年後である。

社会のあり方を大きく変えるような大きな発明を「変革」と呼ぶならば、私たちの社会は幾度かの変革を経て大きく変わってきた。100年以上続いた狩猟採集社会から、約1万年前の農業革命を経て農耕社会へ、約250年前のエネルギー革命（蒸気機関の発明）を経て工業社会へ、約40年前の情報革命（インターネットの発明）という大きな変革を経て情報社会へと変化してきた。さらに近年、すでに述べたように、ディープラーニングと呼ばれるコンピュータ・アルゴリズムの発明により、情報革命で蓄えられた巨大なデータ（ビッグデータ）の解析技術が飛躍的に進んだ。これはアルゴリズム革命と呼ばれることもある。そしてこの度、トランスフォーマーの発明による大変革があらゆる分野で起こりつつある。今の世の中は変化のスピードが恐ろしく早い。このことについて述べてみた。表題の答えはまだ分からない。（運営委員）



研究所活動報告

◆所員研究成果（新刊）

小林真由美・鈴木正信 編著
『日本書紀の成立と伝来』
雄山閣発行 376 頁
A5判 令和6年2月25日 9,900 円税込

<目次>
はしがき 鈴木正信
第一部 『日本書紀』の構造と受容
雄略紀朝鮮半島記事の編述 瀬間正之
「和銅五年上奏日本紀」について―『古事記』
の撰録をめぐる一つの臆説― 加藤謙吉
自敗自服する賊虜と日本書紀β群の編修
―太安万侶の関与をめぐる― 葛西太一
『日本書紀』の「武」について―国土を
ひらく英雄たち― 小林真由美
日本書紀講書と竟宴和歌―「飛驒の匠」の
形成と流布― 水口幹記
第二部 『日本書紀』の氏族と天皇
倭国造・倭直氏の祖先伝承 篠川賢
広域地名を冠する氏族から見る『日本書紀』
中村友一
『日本書紀』の蝦夷関係記事に関する基礎的
考察―エミシ表記論の視点から― 永田一
安閑后妃関係ミヤケの歴史的位置 堀川徹

◆所員研究成果（新刊）

トーマス・J・チョルダッシュ著 飯田淳子・
島蘭洋介・川田牧人監訳 津村文彦・
野波侑里・堀口佐知子・村津蘭訳
『聖なる自己
カリスマ派の癒しの文化現象学』
水声社発行 457 頁
四六判 令和6年1月10日 6,600 円税込

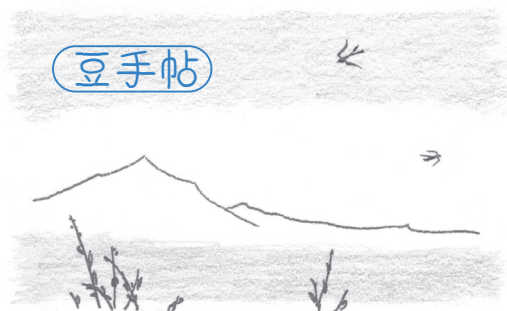
本書は、米国を代表する医療人類学者／心理人類学者であるトーマス・チョルダッシュの最初の単著（初版1994年）である。著者の活躍は1990年代より、「身体化／身体性（embodiment）」や「注意の身体的様式（somatic mode of attention）」などの概念で英語圏の人類学界では非常に有名であり著作も複数刊行されているが、彼の単著が邦訳されるのは本書が初めてである。先にあげた概念は、本書においても鍵概念として用いられている。
米国・南ニューイングランドにおけるカリスマ派カトリックにおける宗教的癒しの実践において何が起きているのかという問いに対して、本書は、教会での儀礼への参加・観察記録や当事者たちへのインタビューなどの民族誌的資料をふんだんに用

武渟川別の東国平定伝承について―静岡平野の古代氏族の歴史的意義― 須永忍
古代・中世移行期における神器と天皇
―剣璽を中心に― 井上正望
第三部 『日本書紀』の伝承と説話
片岡山飢人説話の形成―『日本書紀』『日本
霊異記』『万葉集』から― 三舟隆之
山上憶良「世間の住まり難きを哀しみし歌」と
「五節舞」 中川久仁子
『日本書紀』崇峻即位前期七月条と四天王寺の
創建―「厩戸皇子」像の検討― 榊原史子
古代の鵜飼と贅 小川宏和
ヤマトタケル伝承と廬原国造
―「焼津の火難」をめぐる― 鈴木正信
あとがき 小林真由美

2020年は『日本書紀』成立から1300年にあたっていた。その好機にちなみ、2019年に共同研究「日本書紀の成立と伝来」を開始した。メンバーは歴史と文学の研究者で、それぞれの専門領域からあらためて『日本書紀』に向き合い、研究報告会を重ねた。コロナ禍で活動ができない時期もあったが、ゲストスピーカーもお迎えして参加者も年々増加し、充実した研究活動を行うことができた。本書はその研究成果論文集である。（小林真由美）

いて明らかにしようとしている。カリスマ派の癒しの儀礼においては、「聖霊の内なる眠り」（人が神的な力によって圧倒され、運動の解離に陥る聖なる卒倒）、「解放（デリバランス）」（悪霊の存在が治療者あるいは嘆願者によって同定・識別され、イエスの名において去るよう命じられること）、「油注ぎ」（特定の儀礼的所作をとともわず聖なる靈感を感受する感覚経験）など、きわめて特徴的な実践がおこなわれている。これらの身体レベルに生じる宗教的経験を現象学的に分析しながら、自己が身体的な他者性を帯びることが宗教的な経験の核心であるという観点から「聖なる自己」が癒しの実践を通して生成される様態が明らかにされている。

文化人類学に軸足を置きつつも宗教学、心理学、社会学、宗教人類学、医療人類学、現象学、記号論等々、非常に広い本書の理論的裾野をカバーするには翻訳チームを必要としたが、その共同翻訳の作業は、民俗学研究所の研究プロジェクト「感覚と感性の民俗誌にかんする基礎的研究」（平成30～令和2年度）、ならびに「感覚と感性の民俗誌にかんする実践的研究」（令和3～5年度）の研究資金をもとに、研究集会を重ねることによって可能となった。ここに記して感謝の意を表したい。（川田牧人）



文面による神仏との交信

成城大学名誉教授 松崎 憲三

漫画『ゲゲゲの鬼太郎』と聞いて、なつかしさを覚える人も少なくないだろう。その中に、「妖怪ポスト」なるものが登場するのはご存じだろうか。鬼太郎に何らかのメッセージを伝えたい人間が、その際用いる装置がこれなのである。なお、異界・他界の存在と文面で交信する民俗例としては、「河童の詫び證文」、役所等から出された疫神への「退散命令書」などが知られている。ここでは、神仏への祈願に文面を用いる、即ちハガキ・手紙の類を出す民俗を中心に上げたい。

この種の民俗を初めて知ったのは、本山桂山の報告によってである。本山は、現京都市伏見区深草町にぬりこべ地蔵の祠があり、その前の郵便受けには京都市内・府内のみならず、大阪・滋賀や遠くは北海道・島根等からハガキ・手紙が届いていたとして、その文面をいくつか紹介している。そのうち二例ほど紹介したい（本山1934『信仰民俗誌』昭和書房）。

1）拝啓陳謝私事右下の奥から二枚目の歯及前歯上奥より七枚目痛み困り居ります。向う一週間桧箸は絶体使用致しまじく御祈願致候間一刻も早く御治し下されませ。
2）五十才女 右下奥より二枚目。

これによりぬりこべ地蔵が歯痛に効験のある仏であることがわかると共に、断ち物をして祈願する例のあることが判明する。2）の事例は極めてシンプルな内容であるが、絵馬に添える文面に通ずるものがある。

一方大島建彦によれば、川崎大師で知られる平間寺（真言宗）の墓地入口にショウヅカノバアの石像が祀られていて、これも虫歯の痛みを治してくれることで知られており、やはり昭和の初期あたりはハガキや手紙で祈願をかけてくる者が多かったという。そうして平間寺執事からの、昭和三十年（1955）前後には、一月に二、三通これとかかわるハガキが届き、昭和四十年（1965）前後までごくわずかであったが同じようなことが続いた、との話を聞き取っている（大島2002『民俗を訪ねて』私家版）。

以上は過去の事例であるが、実は今日文面

による祈願が流行っている例も存在する。それは福岡市早良区・野芥縁切地蔵である。地域の人達が管理する比較的コンパクトな堂宇の中央に石像の地蔵が安置され、三方の板壁には男女背中合わせの小絵馬や封書が貼りつけられており、筆者が調べた平成25年（2013）時点で前者が15点、後者が383通を数えた。元々は石の地蔵を削り取って縁を切りたい相手に飲ませ、願いが叶ったらお礼詣りの際に絵馬を奉納するというものであった。しかし、徐々に絵馬の数が減り、文面を封書に入れて奉納する形が圧倒的に増えた。個人情報保護の動きも多少かかわっている。ちなみに祈願内容も男女の縁切りに留まらず、金遣いの荒い父親やいやな上司あるいはクラスメイト、意地悪でおこりっぽい社会人のサークル仲間、さらには不景気や貧乏、不治の病いとの絶縁を願うものまで多岐にわたる（松崎2016『民俗信仰の位相』岩田書院）。小絵馬の購入には、堂宇から少し離れた家まで出向かなければならず面倒なことと、先に触れた個人情報の保護観念の浸透に伴って、封書が絵馬を凌駕するようになったのであるが、切手つきの遠方から届いたものも少なくない。社会が複雑になり、トラブルや悩みは増えこそすれ絶えることもなく、神仏にすがる手段の一つとして、文面、手紙は重宝この上ない。絵馬と異なり、当人の思いと願いを、どれほど長かろうと好きに書くことができるからである。

ちなみに、昭和末期頃ファクシミリによる合格申請を、太宰府及び防府天満宮が受け付けるようになった。ファクシミリによって申請するとお守りと振替用紙が送られてくるというものであった（山折哲雄1989「方法としての『もどき』』『日本研究』第1集、国際日本文化研究センター）。現代風文面・代参方式による祈願といえる。今ではネットによる申し込みにも対応しているようであるが、神仏に思いを届けられるものならば、絵馬あるいは手紙・ハガキであれ何であれ、手段に頓着しないというのが庶民のスタンスなのである。（第八代所長）

《民俗学研究所公開講演会》

岩本通弥氏

「日常学としての民俗学」の提唱 —柳田國男『世相篇』をどう読むか

日 時：令和 6 年 6 月 15 日（土） 午後 1：30～3：30

会 場：成城大学 3 号館 1 階 311 教室

〔講演者略歴〕

1956 年 東京都生まれ

1986 年 筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科単位取得退学

現在、東京大学名誉教授

〔おもな著書〕

『民俗学の思考法—〈いま・ここ〉の日常と文化を捉える』（共編、慶応義塾大学出版会、2021 年）

『方法としての〈語り〉—民俗学をこえて』（編、ミネルヴァ書房、2020 年）、

『ふるさと資源化と民俗学』（編、吉川弘文館、2007 年）、等。

予約不要
直接ご来場下さい

《所員研究例会》

日 時：令和 6 年 7 月 11 日（木） 午後 2：40～5：00

会 場：成城大学 2 号館 1 階大会議室

発表者・テーマ（発表順）

及川 祥平氏（所員）「心霊スポットからなにが問えるか—場所と記憶の民俗学—」

田口 亜紗氏（研究員）「「生理休暇」の誕生から「生理の貧困」へ—月経の医療化と個人化の進展—」

◇ 人事

・民俗学研究所長：小島孝夫 文芸学部教授（令和 6 年 4 月 1 日発令 再任）

編集後記

民研ニュース 144 号をお送りします。巻頭言には増川純一経済学部長による「トランスフォーマーが作るのはユートピアか？」を掲載しました。近年注目を集めている ChatGPT について、その仕組みや成り立ち、さらには人類史的な意義まで解説をいただきました。技術の発展が生活を変えていきますが、ChatGPT のような人工知能の発達、私たちの生活をどう変えていくのかは、期待と不安が相半ばします。研究成果としては小林真由美所員、鈴木正信所員が編著者となった『日本書紀の成立と

伝来』、川田牧人所員が監訳者として加わった『聖なる自己 カリスマ派の癒しの文化現象学』を紹介いただきました。豆手帖では松崎憲三元所長から「文面による神仏との交信」との題目で異界・他界との交信方法、特に文面を用いる方法の変化についてご寄稿をいただきました。恒例の公開講演会は東京大学の岩本通弥名誉教授をお招きして開催いたします。また所員例会も及川祥平所員、田口亜紗研究員を発表者として開催します。ご興味のある方は是非ご参加ください。最後になりますが、御寄稿いただきました先生方に改めて感謝申し上げます。

民俗学研究所ニュース No.144



令和 6 年 4 月 25 日発行

編集兼発行人：成城大学民俗学研究所主事 小澤 正人

〒157-8511 東京都世田谷区成城 6-1-20

TEL：03-3482-9097・9098 Fax：03-3482-7763

mail：minken@seijo.ac.jp